

成形圖說

五穀部

十六

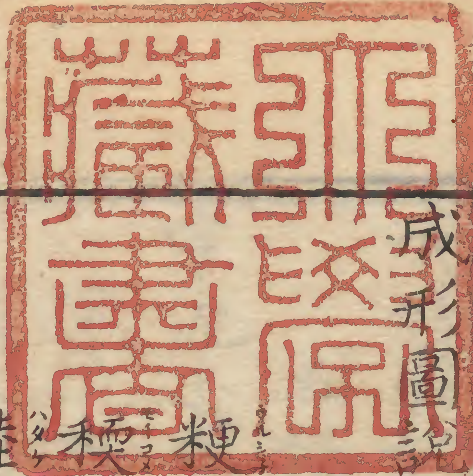
三	六	二	和
〇	一	一	書
冊	架	函	門
		號	類

庫	文	閣	內	
二	三	二	和	
九	一	一	書	
六	〇	八		
冊	冊	號		

內閣文庫	
番號	和 21180
冊數	30 (16)
函號	196 97



成形圖說卷之十六



成形圖說卷之十六

目錄

附早中晚

附染餅

陸稻

私

稻孫

魯

淺草文庫

成形圖說卷之十六

五穀部類

宇流志禰書紀○延喜式よハ米の一字と宇流志

宇流與禰按米と志禰ハ稻米の逆禰あり

真米志夜久乃米蓋字鏡ハ謂志良介米の訛也白と志

て約河

粳和名鈔引本艸粳米一名粳米音じと

四氏月令作粳稻○天工開物云稻種不黏者禾音庚即粳

紀稻曰秠米曰粳志うれと秠今通し同一也小師古

蕃名レイスト

成形圖說卷之十六



うはとく獲あり延喜式に獲の字を書き志称八年稲
 の幼ツギもより年八穀イナモの為ある六と時節の所よくとし
 くんえとる此との米の中あてと結よなりて獲ウルとの
 著イナモるれバいつりて一ツギは潤ウツ稲イナモせと米のうはとく凡イナモ種の巻ツギ
 米コメと糯ホト米コメを較ヒキみるに種タネハ稍ヤ光澤ツギありて此コメのハ即イナモ人の
 常カに糧カとし食イナモす所の米より早イナモ中イナモ晩イナモの三種イナモあり
 了夫和漢土地と異コトよし米性の美惡イナモ迫イナモよいそ一かき
 とら一とも之種ツギ獲イナモの時節イナモわだがもさほよむてハ益イナモ善イナモ
 天乃同イナモうもる所あり但南イナモ北イナモ寒熱イナモに偏イナモものは早イナモ晚イナモ日イナモは
 同イナモして滋イナモくく況イナモ況イナモやそ名イナモ品イナモりて一國の中一郷

の消ふして各地の俗用一定なく或ハ同種ありて數十
 名又其形状と相分子毫厘の差なくして又稲種ハ時々
 流移するものと種れハその三四年は成実するしと
 て種易して地るものなれハむり今この種穀と良莠
 の分るは故に徧く四方の俗種と考ふるよ及各地日産
 究ておのほかろ知るものありし
字書ニ種又特種鳥稜
赤稷白稷あり皆稲の
 田令曰凡官
 田應役丁之處毎年宮内省預准米來年所種色目及町段
 多少依式料功申官支配
義解謂色目者稻白黒
為色也稻名為目也 稻名ノ字
 えらる最尚し其後の考に袖乃兒長日子穗多兒ふどく

稻の名と詠ふあり今稻種妙傳する所稻名亦多し○和
 名鈔引唐韻類青稻白米也實白稻とあり糲或按風
作糲
 土記穰穀之紫莖種稻之有青穠米皆青白者也又表淮觀
 殊俗云河内青稻新成白種淵鑑類函ニ身々あり
 和世萬葉集歌よとめらよ紗衣のう速稲と刈るに
なり下に總國葛城郡の中ニ五中とありありは此の早
稲あり東國第一の早種といひ一説ニ秋の初いとせや
く熟ぬきは夏と秋との合といひ又一説人の名
をとりての早稲ハよりわすれぬといひ又一説人の名
とあり 早手手より義中より 早代匠材集○志呂
ハ世と通り
 早稈本州○時珍云六
七月收者あり 早稻幾暇格物論○聞書
云春種夏熟曰早稻 早禾
 農書 穆稻農政全書櫃田淺
侵處宜種黃穆稻

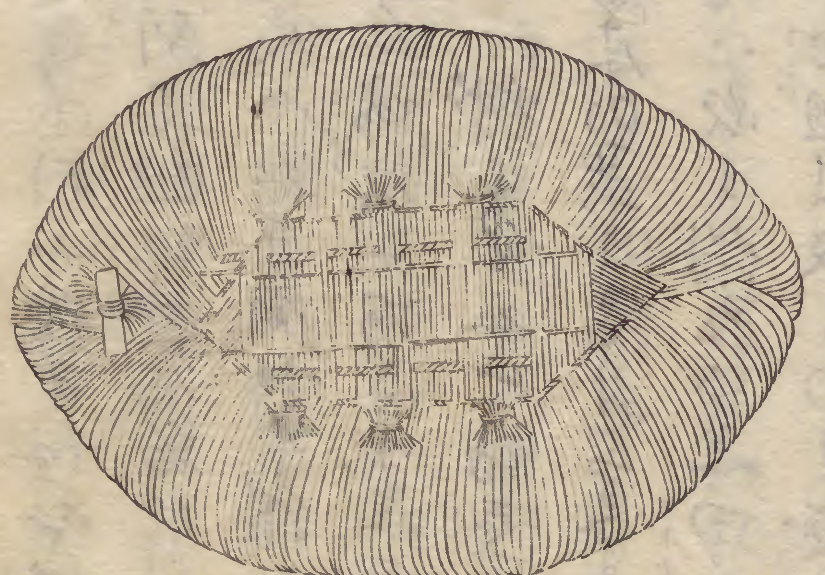
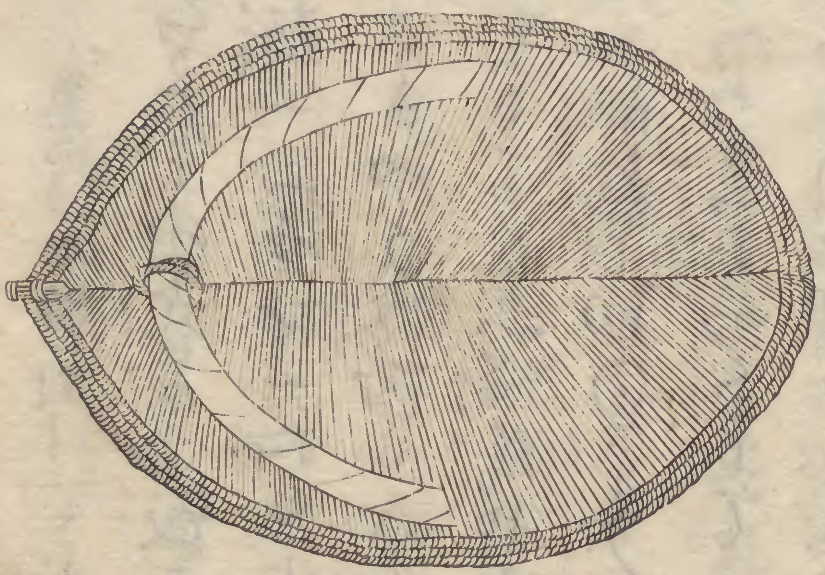
福よめ^{ヒトシ}と初^{ヒトシ}夏^{ヒトシ}として秋^{ヒトシ}令^{ヒトシ}と仍^{ヒトシ}あり
 今^{ヒトシ}一^{ヒトシ}節^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ}と^{ヒトシ}り^{ヒトシ}の^{ヒトシ}元^{ヒトシ}子^{ヒトシ}し^{ヒトシ}は^{ヒトシ}稗^{ヒトシ}花^{ヒトシ}開^{ヒトシ}く^{ヒトシ}は^{ヒトシ}後^{ヒトシ}の^{ヒトシ}種^{ヒトシ}也^{ヒトシ}
 即^{ヒトシ}宜^{ヒトシ}浅^{ヒトシ}の^{ヒトシ}月^{ヒトシ}早^{ヒトシ}は^{ヒトシ}必^{ヒトシ}熱^{ヒトシ}なり^{ヒトシ}なる^{ヒトシ}一^{ヒトシ}早^{ヒトシ}の^{ヒトシ}種^{ヒトシ}と^{ヒトシ}る^{ヒトシ}
 勿^{ヒトシ}し又^{ヒトシ}様^{ヒトシ}子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}と^{ヒトシ}り^{ヒトシ}の^{ヒトシ}は^{ヒトシ}様^{ヒトシ}花^{ヒトシ}開^{ヒトシ}く^{ヒトシ}は^{ヒトシ}後^{ヒトシ}の^{ヒトシ}種^{ヒトシ}也^{ヒトシ}
 伊^{ヒトシ}勢^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ} 尾^{ヒトシ}張^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ} 肥^{ヒトシ}前^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ} 五^{ヒトシ}島^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ}
 白^{ヒトシ} 小^{ヒトシ}島^{ヒトシ}子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}多^{ヒトシ}種^{ヒトシ}と^{ヒトシ}る^{ヒトシ}よ^{ヒトシ}上^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}其^{ヒトシ}如^{ヒトシ}種^{ヒトシ}
 と^{ヒトシ}波^{ヒトシ}せし^{ヒトシ}本^{ヒトシ}土^{ヒトシ}乃^{ヒトシ}名^{ヒトシ}と^{ヒトシ}呼^{ヒトシ}ぶ^{ヒトシ}る^{ヒトシ}耳^{ヒトシ}又^{ヒトシ}越^{ヒトシ}中^{ヒトシ}子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}あり^{ヒトシ}是^{ヒトシ}北^{ヒトシ}
 國^{ヒトシ}の^{ヒトシ}種^{ヒトシ}なり^{ヒトシ} 房^{ヒトシ}前^{ヒトシ} 刈^{ヒトシ}草^{ヒトシ} 熊^{ヒトシ}谷^{ヒトシ} 神^{ヒトシ}兒^{ヒトシ} 綠^{ヒトシ}葉^{ヒトシ} 荒^{ヒトシ}芭^{ヒトシ}
 湯^{ヒトシ}田^{ヒトシ} 笑^{ヒトシ}樂^{ヒトシ} 吾^{ヒトシ}待^{ヒトシ}受^{ヒトシ} 葉^{ヒトシ}隱^{ヒトシ} 網^{ヒトシ}子^{ヒトシ} 芭^{ヒトシ}茅^{ヒトシ} 小^{ヒトシ}穗^{ヒトシ}星^{ヒトシ}
 楊^{ヒトシ}柳^{ヒトシ} 根^{ヒトシ}乳^{ヒトシ} 葉^{ヒトシ}潤^{ヒトシ} 大^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ} 小^{ヒトシ}島^{ヒトシ}子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}あり^{ヒトシ}の^{ヒトシ}名^{ヒトシ}を^{ヒトシ}考^{ヒトシ}へ^{ヒトシ}し^{ヒトシ}が^{ヒトシ}

し子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}種^{ヒトシ}子^{ヒトシ}と^{ヒトシ}呼^{ヒトシ}ぶ^{ヒトシ}る^{ヒトシ}より^{ヒトシ}其^{ヒトシ}名^{ヒトシ}を^{ヒトシ}考^{ヒトシ}へ^{ヒトシ}し^{ヒトシ}が^{ヒトシ}
 て^{ヒトシ}れ^{ヒトシ}ら^{ヒトシ}が^{ヒトシ}十^{ヒトシ}日^{ヒトシ}め^{ヒトシ}は^{ヒトシ}乾^{ヒトシ}し^{ヒトシ}よ^{ヒトシ}い^{ヒトシ}ら^{ヒトシ}が^{ヒトシ}ん^{ヒトシ}の^{ヒトシ}湯^{ヒトシ}と^{ヒトシ}俵^{ヒトシ}の上^{ヒトシ}
 已^{ヒトシ}灌^{ヒトシ}漙^{ヒトシ}と^{ヒトシ}も^{ヒトシ}ち^{ヒトシ}い^{ヒトシ}茶^{ヒトシ}と^{ヒトシ}出^{ヒトシ}し^{ヒトシ}と^{ヒトシ}は^{ヒトシ}二^{ヒトシ}月^{ヒトシ}啟^{ヒトシ}靄^{ヒトシ}の^{ヒトシ}前^{ヒトシ}
 播^{ヒトシ}て^{ヒトシ}四^{ヒトシ}月^{ヒトシ}初^{ヒトシ}旬^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}皆^{ヒトシ}秧^{ヒトシ}と^{ヒトシ}拔^{ヒトシ}起^{ヒトシ}て^{ヒトシ}分^{ヒトシ}載^{ヒトシ}り^{ヒトシ}七^{ヒトシ}月^{ヒトシ}中^{ヒトシ}旬^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}
 獲^{ヒトシ}収^{ヒトシ}じ^{ヒトシ}げ^{ヒトシ}の^{ヒトシ}粒^{ヒトシ}少^{ヒトシ}く^{ヒトシ}味^{ヒトシ}為^{ヒトシ}し^{ヒトシ}蓋^{ヒトシ}稲^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}其^{ヒトシ}如^{ヒトシ}種^{ヒトシ}也^{ヒトシ}
 好^{ヒトシ}む^{ヒトシ}子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}ハ^{ヒトシ}種^{ヒトシ}子^{ヒトシ}と^{ヒトシ}呼^{ヒトシ}ぶ^{ヒトシ}る^{ヒトシ}より^{ヒトシ}其^{ヒトシ}名^{ヒトシ}を^{ヒトシ}考^{ヒトシ}へ^{ヒトシ}し^{ヒトシ}が^{ヒトシ}
 我^{ヒトシ}藩^{ヒトシ}の^{ヒトシ}南^{ヒトシ}島^{ヒトシ}雪^{ヒトシ}降^{ヒトシ}と^{ヒトシ}霜^{ヒトシ}墮^{ヒトシ}と^{ヒトシ}る^{ヒトシ}ゆ^{ヒトシ}え^{ヒトシ}人^{ヒトシ}を^{ヒトシ}種^{ヒトシ}播^{ヒトシ}て^{ヒトシ}五^{ヒトシ}月^{ヒトシ}
 ハ^{ヒトシ}淺^{ヒトシ}熟^{ヒトシ}ぬ^{ヒトシ}是^{ヒトシ}斯^{ヒトシ}方^{ヒトシ}の^{ヒトシ}子^{ヒトシ}福^{ヒトシ}と^{ヒトシ}呼^{ヒトシ}ぶ^{ヒトシ}る^{ヒトシ}より^{ヒトシ}其^{ヒトシ}名^{ヒトシ}を^{ヒトシ}考^{ヒトシ}へ^{ヒトシ}し^{ヒトシ}が^{ヒトシ}
 肥^{ヒトシ}前^{ヒトシ}早^{ヒトシ}稲^{ヒトシ} 類^{ヒトシ}わり^{ヒトシ}天^{ヒトシ}工^{ヒトシ}用^{ヒトシ}物^{ヒトシ}所^{ヒトシ}謂^{ヒトシ}其^{ヒトシ}冬^{ヒトシ}季^{ヒトシ}播^{ヒトシ}種^{ヒトシ}仲^{ヒトシ}夏^{ヒトシ}即^{ヒトシ}收^{ヒトシ}者^{ヒトシ}
 則^{ヒトシ}廣^{ヒトシ}南^{ヒトシ}之^{ヒトシ}地^{ヒトシ}無^{ヒトシ}霜^{ヒトシ}雪^{ヒトシ}故^{ヒトシ}也^{ヒトシ}と^{ヒトシ}い^{ヒトシ}ふ^{ヒトシ}と^{ヒトシ}し^{ヒトシ}然^{ヒトシ}と^{ヒトシ}も^{ヒトシ}衿^{ヒトシ}陽^{ヒトシ}雜^{ヒトシ}

録と関カミル朝鮮早稲の種穀と載り朝鮮ハ極ての地
 土なれともふも生ハお魚のふ稲りるもいともあり○凡
 子稲と作りの利ハ東に七八月の間又むれハ洪水人風
 子遇て種とまふふいとの成りなむ子稲とれハ夏月法
 穀の種と種と種て入ハ済せの利と蓋し農民と食物
 困シレト又麥種と種ワシの力イト成りるをりハ東陸州ハ推陽の地
 まで河合ハ西南より近寒サムサと一ととと田ハ早
 稲と播ハコわる農夫フユウチ終中より田越るも冬春草れ根と断
 て土の膏澤アウラキとまふとつとつとと田中一平馬通原
 ハつとよ及ど本皮菜菜或ハ麩苔諸芥とも播ハコむと田中

天子御艸ナミ橋圖ハシ 柿カキめとハ南都春日の社家米七升
 つく下行して一足と他包むると云

稲得 一筋 表裏 取合 先と 後と 細さ 稲穂 縮む



裏ハ 皮及 ぬ程 あり 麻の 糸を さらか

成形圖説卷之十六
 鼻緒ハ常の艸履ハぶと
 横仕ハ白奉書紙にて包む
 鼻緒の紙と紙
 七

へおろしと土と反はみと耕通して春月揚戸嫩葉と芽と
 候て石草等とぬれくカシキ 耗るまの三月中種と播て栽
 じりせりも耐老農田オトナ タウチ 畝を附副て秧と挿は者に播川と
 多の類一二本と一科とし二尺四五寸間許を根涼く土
 よ入さるやうに植るまかりかく稀ヒヅラ 疏ヒヅラ したるゆゑ苗根よ
 日あさるよく滋茂サカエ やまぐ一科よと二十餘モト 莖モト するは
 ぞ地又鋤スキクサリ 転カ 初ハジメ のころくまよの葉よまよオトナ 実ウリ するまよ
 田地へおろしかくして七月ハ既上刈ウチ ぬゑ田戸オトナ 罷ウチ
 せしてそれと得たり又曰す田租チンダ は段セグ するは糞モミ 屎ミ 一科
 八斗又藍苗アヲカサ 等の年税ラサメ あり按ア する一科一二本ク 作ス かし

て蘇ソ の間マ 耕カ するものハ土地を編ヒ めりモト するゆゑ
崔寔 崔寔四 民月令云三月可種種 粳粳
稲美田 稲美田欲 稀薄田欲 稠稠 即是耳是耳 去去 するは米穀米穀 狼戾狼戾 して
 しまのころより後後 とも臭氣臭氣 ありしものば米穀米穀 狼戾狼戾 して
 收穫トク より磨ハ じよハ 玉玉 して鹵莽メツタ なるがゆゑあるま物物 遠奥遠奥
 土肥等の玉ハ土地地 潤潤 く厚厚 りゆゑに初初 より田地地 肥養肥養
 と施シ する及及 山形等の田ハ子種サナハ と栽栽 るのあはれ地中へ
 入入 きて川泥川泥 と拌カキ じの濁濁 流流 せしめて一度のころして
 再ヒ 糞糞 と用用 するなりと酒酒 作り又秋田頃頃 の子種子種 米ハ浪華浪華
 に致して秋の彼岸彼岸 後後 より子造ハヤツリ 乃酒乃酒 不釀不釀 せり俗俗 する之を
 何何 等の造造 と云農業全書曰早稻ハ苗代苗代 よおくすむ十日

して初苗と取らるるより中田ナカノ田タ十日ちどつて水と
 置て次芽と種子と前倉し五月の節より夏むすくの節
 梅雨の水と交て苗とさすより天下一回のリナカ霜ありある
 四し急シ中ナカ田タよりてう急シ霜シよりうしあつた後のよ入と
 冬してても必キ夏少しいらんともあつたハ暖ナまあるに終りて
 上に昔甘らるる氣の盛シなりて枝葉ハさうゆれとも立
 根ネ子コ結ツの入イれともくふしともあつたれとも束ス水の稲
 ハ三月次霜水の解トとて即ト苗代ナとをし四月より種タと
 ころより七月初までハ僅シよ一二尺計めて秋の氣とうけ
 てさして立延シと種タのあつたと實ミつりともあつたわけともさすよ一

月の中に浅シくともるる是レハ物の日氣とゆて成熱ナの程シ
 ありあつて春ハさきよく刈ハるよ子コ稲イネの實ミのり反て
 よろし漬貫行シ早稲の莖ハ長く穂粒多く味甘ミく臭ニ香ヒ
 しいきハ地上の氣とうけて一概ニハ生オ立ヒがなまり遊オ稲イネハ
 莖長低シく穂粒少く味淡シきハ地上の陰氣シよ達ヒて生オ立ヒば
 ありあつれとも是東北の據シもとも遊オ稲イネの粒少く味淡
 しともハ不通の粒シゆるるハ康富記シハ尾花粥シといふは
 禁中にハ初ハ子コ稲イネの黒燒シと粥シハ粥シくともさすよハ
 尾花シと黒燒シやれしともりかく粒シともりや

中手 字類鈔○藻塩草 中手中田の稲と 中手稲夫本集各々 中ての稲
中田の稲と

こふ出るる... 二番物 俗云

早稲 以上本州細目時珍

中稲 遲稲 八月収者為遲稲

半夏稲 蔡邕月令章句 十月獲稲人君

嘗其先熟故在九月熟者謂之半夏稲 按半夏稲亦中稲

の事也 周の十月ハ今ハ八月なり 禮記舍人懸種種之種

註後種先熟曰稔種亦作稔毛詩黍稷重稔疏上ハ同し周禮亦おれし

蕃名 中手ハ即中羊稻也 手ハ年の幼くもなり祝詞式ハ奥

手ハ奥ハ津奥津御年と云ふもてははし年の志ハ勢

と通ふハゆゑハ和勢と云ふ又年稲と幼て志祿と云

いり又特して麻の志ハハあててははしと云ふ葉ハ

ええり

申すの稲ハ二月春分の頃種を撒入てより五月

八十八夜の節より早苗と云て裁けあつて八月中旬

より先と云ふ又十月より熟家と云ふ凡中稲の熟るる

種より追して中香子ハさきと云ふ稔米とも云ふ白し飯

よ炊ておろくを釋ハ家草よりハ種と云ふり種とも收実を

少と云ふてははしと云ふは染盛と云ふり種ともあり

稲ハ一種取芳氣以供貴人收實甚少滋益全無不足尚也

本州蘇頌云香稔長白如玉可充御貢即その物なり又農

政全書ハ香子と云ふ致富全書ハ寄穂と云ふ共

香福と云ふる等回種と云ふし 寄穂と云ふ共

てははしと云ふは米の上等と云ふ 累兒と云ふし稔

饗蔓 サシヨシ 稗米 近江兒 サシヨシ 稗米 暹越 サシヨシ 赤く稗米 白

表毛 サシヨシ 赤毛 黒稻 サシヨシ 稗米 黒稻 サシヨシ 稗米 黒稻 サシヨシ 稗米

黒米 烏稻 黒稻 サシヨシ 稗米 黒稻 サシヨシ 稗米 黒稻 サシヨシ 稗米

京白 飯桿 負荷田 毛實 一節 絹買 百倍

子實一倍 表無 庭溜 冷毛 砂子 青飯 黃治

赤黄 サシヨシ 赤毛 稻 サシヨシ 赤京 稻 サシヨシ 此他 尾張 美濃 サシヨシ 美濃

ありて形状較差 サシヨシ ありて サシヨシ 類細 仲の 曾 殊 サシヨシ 美濃

奥手 サシヨシ 百葉集 ○ 祝詞式 サシヨシ 奥津 御年 サシヨシ 云云 是より 和名 鈔 順

於志 彌 サシヨシ 和字 正 濫 鈔 歌 サシヨシ 又 サシヨシ 収 サシヨシ 収 サシヨシ 収 サシヨシ 収 サシヨシ 収

稲 田床 サシヨシ 田床 サシヨシ 田床 サシヨシ 田床 サシヨシ 田床 サシヨシ 田床

晚稻 爾雅 翼 ○ 本州 時珍 云 十月 叔者 為 晚稻 又 云 諸 本 州

の 名 と 奥 年 と 多 と 稱 して 晚 稻 の 事 云 録 して 一 稲 の 最 上

之 注 乎 晚 稻 未 必 盡 是 稀 也 種 禮 記 種 稔 之 種 註 先 種 後

稽 內 則 註 稽 音 醞 熟 而 獲 之 曰 稽 ○ 正 字 通 云 昂 今 晚 稻

之 注 乎 晚 稻 未 必 盡 是 稀 也 種 禮 記 種 稔 之 種 註 先 種 後

之 注 乎 晚 稻 未 必 盡 是 稀 也 種 禮 記 種 稔 之 種 註 先 種 後

之 注 乎 晚 稻 未 必 盡 是 稀 也 種 禮 記 種 稔 之 種 註 先 種 後

之 注 乎 晚 稻 未 必 盡 是 稀 也 種 禮 記 種 稔 之 種 註 先 種 後

之 注 乎 晚 稻 未 必 盡 是 稀 也 種 禮 記 種 稔 之 種 註 先 種 後

ハ最よいつるがぶと穀の各ふれハ粒晚禾とありま
 じきぞはるは裏より唯晚の義とのを解は手と
 赤く何あつたわちとともなうりつ

此との種ウレハ中稲とおれし所謂先種後熟あり四月
 中旬よりして小苗と成り五月六月までと極りせり
 十月十一月よりありありと刈りし又片山里の溪
 田とよハ十二月頃あつたはるの有りかくはまよハ
 毛也と硬く猪糞とりの種つゝながくはるものやうは
 りり存蓄しては赤裏とつゝものの上等とやると赤
 く稗淡江く面白し此他 白京 又青白 楊兒 海馬毛

- 鱈子 大堂 石堂 大實延 亦小實 白糶 石子
- 小節 双無 小塩蔓 霜破 白笑 四十床反 佐安
- 香寄 十節 十節 音不 音不 音不

晩稲田ハ刈種て露やげよあつしとくえゆめ
 かがり志留は後くうまよハ人の用めとつらて地
 懶とつ甲斐あつぞおももまは玉苗のまらつて田
 のまことなれいふと飛ハいよくつたよよし結
 稲のおとあれつハ刈種あつとく秋のもの
 びしとよはるりつとつたよよし結

云地土高下燥溼不同而同於生物生物之性雖同而所生
之物有宜有不宜焉土性雖有宜不宜人力亦有至不至人
力之至亦或可以回天况地乎宋太宗詔江南之民種諸穀
江北之民種秔稻真宗取占城稻種散諸民間是亦大易裁
成輔相以左右民之一事今世江南之民皆雜時諸穀江北
民亦兼種秔稻昔之秔稻惟秋一收今又有旱禾焉二帝之
功利及民遠矣と有り是實も今日の急を救ひつ時の利
と資の術とつても凡土宜を天地の留おのり
南山の突あわれハいゝと人カと令しつりとも終
ハ回天の術と救いがし物とハ高麗を就ハ重遠ハ

と成迂濶うして亦迂まづりとも有り迄世文祿の頃始
て甘藷と蕃船と獲りてより西南の地ハ山野肥磽と
なく播殖して百穀以下今日の急を救ふりの急なる
るハあしきるまてと糯米のせよ羸羨あるハ何事ぞ甘
藷のたるとハ其種播き易簡して水田の作苦一つ、
且旱潦風蟲と思ふの患あるハ必稲種イナの耕耘ハ大やう
にあり初るる所とあせぬし又稲ハ不熟とも當年ハ
村落土生るるとして一方よこのまありふも何なるべ
し凡むり甘藷の類ありて似種むるも何と何と
よと文乃その類なくならしむかば終よ似て死を



去て一足と我地もあつどと農業は勤而さおあしを
 以味よふふ水利巧と加ふさハ却て濃を失ふと多し
 元耶律楚材每言興一利不若除一害生一事不若減一事
 と此の謂あり

餅米 新撰
字鏡

餅乃米 和名

毛知志福 餅稻

粳 音梗俗作糯糯 ○和名鈔引蒼頡篇糯米
 之黏也 ○天工開物稻種黏者米曰糯
 稻也詩豐年多稌天工 秣稻 呂氏春秋 ○晉書陶淵明為
 開物稻種黏者木曰稌 秣稻 彭澤令公田悉令種稻為
 子固詣種粳乃使一百五十畝種秣稻五十畝種粳 ○通雅引
 內則云菽麥黃稻黍梁秋惟所欲七者以稻與秣稱秣為糯

法橋洞龍美清筆

稻為種梗即執洲明種林以取酒
是也此確證可以正本艸之誤

大師古紀

蕃名クレーイスト

毛知ハ粘氣有りて地ニ附着するの粘り
張りのハ引強バ粘も亦おれし天工陶物
たきよりなり

又保食ともいふ食亦毛知とつひしと云

海をくぐり今村名ハ餅田飯

凡糯亦早中晩の種あり多く中晩の二種あり糯ハ軟

山にて粒大あり西州より早糯とりは七月比熱む餅

又作て最よし六十日亦早糯ありは七月比熱む餅

稲白く白糯微さあり赤

米長し白糯微さあり赤

此他五十餘種の名品そあ

て而糯ハ多込あし大畧

微あり蝦腹近江子膳脂深墨の濃

あり稗米穂生紅米白し稗淡御傘稗米共綿白稗米

白共白し松越之糯粒細く色米の形は似たり

岩摩葉稀饗蔓鶉鳥古凡禮擇穂谷渡

落不待岩越頸長身陰疏稀装毛漆稻

泥田坪瀬重累糯米は農夫の利わ

といつとも云つまやもく又粘麻の属好む

れハ多く地りざし赤石候深空上めて風味佳し餅

作りて脚つよしといふ

延喜乃御宇近江國より大嘗會に供御あり一冊



はらみ
乃屋
かびみ
のひ
たれ
はらみ
てそ
尺ゆゑ君々子孫あはれびと大嘗

糯米ハ為祖神スミメクツレノ葉威ソナハニ供給ソナハあり字鏡順鈔等に
餅ノ一字もて毛知此と訓也又職人歌合ソナハも是れをせ
は秋の用乃西の穠シホもちいねのまにいつる山の深の月
今も知とのこゝろハ畧ハガゆる也禮内則註ソナハニ資稻餅也炊
米持ツク之キ以豆為粉糝トツク餐上モチノウヘニ也 爾雅翼云合蒸則曰餅餅之則
以為表餅言 夫正月元旦の禮節ハ 神武天皇の御宇ニ
始め行ツクしり本本紀ニも是れをりてて歳首トシノノ餅と製ツクて饗
餅と稱ナふはしり 日神磐戸ニありしとせおもはるは時
に御象鏡ミカガミノ鑄ツクまりて祈イノりしるに再ハ磐戸ニ明アキラかひしと
い佳例イサキノよゆりて新玉ニの身ミ之ミ返マゼる春の初ハジメはりの常時トコナリ

餅又しとうつては野多明ぬる加慶日まんきつ
 次い第の塘河院後度百首えりよりい成ととち
 いのまをかくてうれはま新と空のしつては
源朝樂 事云正
 月朔日以春餅為上供○對類大全註麥米粉
 做成餅形如鏡入於爐内烘熟蓋始于戰國又餅と加知等
 といふとと學漢問答に京師五條天神の勝餅より起て
 この餅と食ハ物小猶とつて功能はつよしといは傳ハ猶
 餅ハ本餅あり 山崎垂加詩に永言少彦名經濟起蒼生除
神ありて本朝醫の祖あり蒼生永くとの遺澤 藤堂樂菴
に頼とてとよむり粟冬本餅と祀るなり
 説子加知年ハ擲飯ありとつて俗に家鎮禱塵歌賃
 多と書ハ餅字なり 正月齒固餅ハ建武年中行事引江

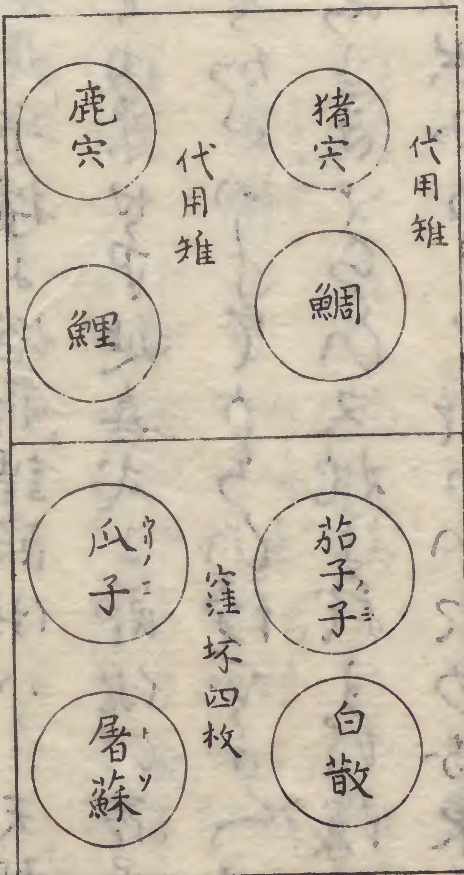
次第抄曰齒謂人年齡也齒固者延年固齡也餅曰稱御節
 供是乎按俗所謂節供ハ天朝佳節の供御とつて
 自由來せ申延喜式に節供の名るるぬ源氏初巻の巻子
 もかこのしつてめちの侍とつてりよせて子供の餅と
 志るまといふ又枕子残すは寝葉はよもいと延了惠固
 の供ふもしつてはりいためは東鑑に齒固賀ハ事あり 荆楚
歳時記云元日食膠牙錫取膠固 ○人生て後ハ餅とつて
之義くはるも新やるわがゆ
 賀と陳付るふとむり 天孫奉藩竹屋の宮里に
 して海邊ゆしくもり何に釀天甜酒又為飯嘗之と本紀
 よ志るされしは始とて之と産書とつて通證曰凡皇子

類聚雜要鈔

供御脇御齒固六本立

三箇日同前也
御臺盤所供之

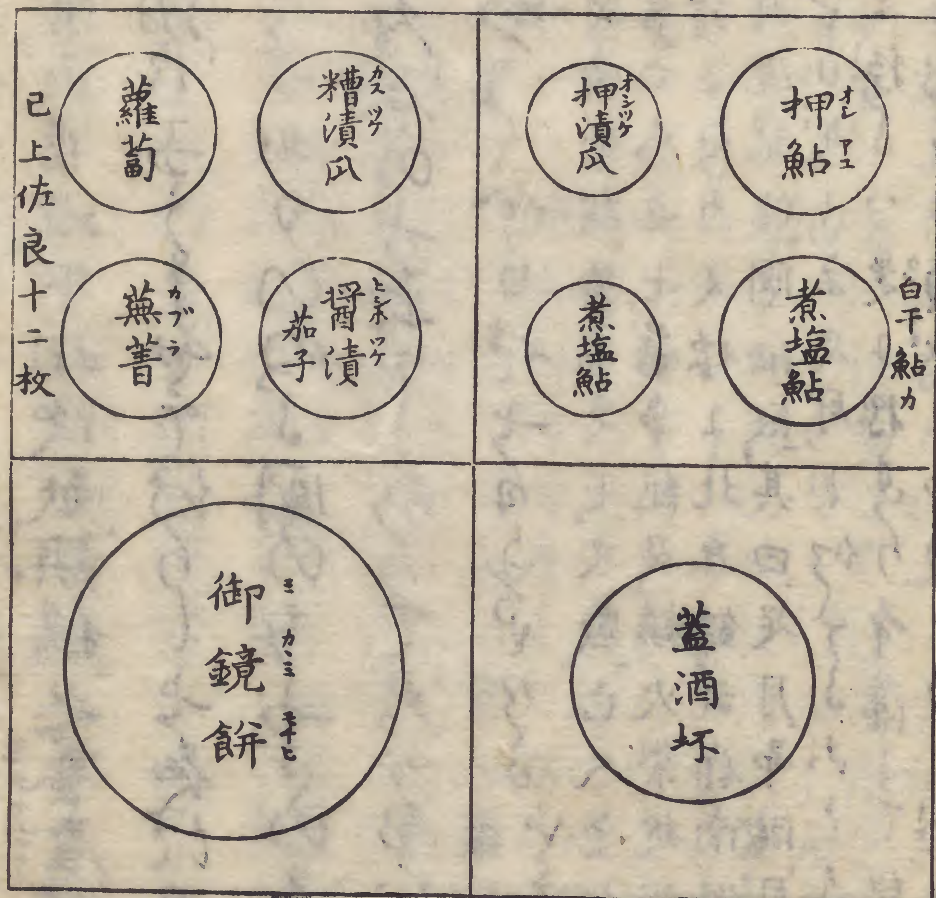
近代鯉雉鯛鱸如此盛之



料 但不入自内膳司者也

料 但不入自内膳司者也

成形圖說卷之十六



置鏡餅上物

讓葉一枚蘿蔔一株

押鮎一隻三成搗一

枚但近代一
成用之

御鏡餅三枚日別自

藏人所出納渡之

此佗の用度餅子預

ざゝハ省あり

の實も生數よそのの百らの机わのといとあこま
 つるしきうどいぢやとらるしとよの志まひしよ
 甲同虫度清事とて改えありてお様とらる昔めさせお
 ちして六月十日の事いとせまふくさるよそ
 こし民安く國をなれハ此處とつとめて高皮おこな
 ともあふらるしとらるはきもふ餅とて少き名を祀
 る事ありあれハ三日の日のもこ祭とおれく蓋嘉
 祥中記言ありし案三月よ母子徳あまがゆあるよ六月
 十日の事は遂は後の係ともなむしよ也 拙筆よそ
 はかりうと唱ふるとりや實は御涼會ふるしとせよあ

日次紀曰嘉祥御 禁裏盛五色養弁諸肴於兩土器各
 紙蓋以十六錢求得物之遺意也按よ世諺問答東見記等
 後嵯峨帝未侍位よ即せよ世時末の嘉定後十
 六文とん食物と穿て供侍とせしよ踐昨の後伴の事と
 傳ありし此日よ行きてよしとせよハ蓋嘉祥と嘉定
 と字あり重なるよとつとあし又夏の土王と餅と食ふと
 歳時記よ六月伏日宜作湯餅食之名曰辟惡又和○豚餅
 樂部よ嘉祥樂あり太田磨ゆる所なりと云々 ○豚餅
 ハ政事要畧引延喜藏人式曰十月初亥日內藏寮進殿上
 男女料餅年中行事秘抄よ柳臼杵とて以て於朝餉方卷
 しめ御衣又令為猪子形以綿裏之柳夜御殿邊四角蜻蛉
 日記よ嘗うすいの御いうよおのころとつとつらぬ
 こととよ万世とよばふ山べ乃おのころとまきとつとつら

ふるよそいふし

日次紀曰禁裡玄猪餅賜赤白黒之小餐餅於羣臣有差也女中御下頭

伊豫局調進搗餅木臼及木杵今日卷之謂率著搗与著訓同祝言其就福也而卷餅者敷裳白下奏相歌蓋猪者多子故此日為餅以祈子孫蕃息也凡十月有三亥日則始用小餐及銀杏忍草中用小餐及菊花忍草終用小餐及楓葉忍草凡所賜之餅色典侍黒者内侍白者以下赤者又曰翌戌日攝津能勢加土太夫献餅於皇宮及上皇宮稱之能勢餅皆恒例矣 ○子のこ乃餅の事源氏流の初のははいつり

まねくもへりむじ三り一まくとけんがしとけり子

のこはいくりまねくせんともと最日定日餅と翌

日子今もあやまり又三り一ハ四杯といふ幾ふと中

此より四の字とまかりて三り一とハいつし 史記晋悼夫傳

又於今三之一也と本朝文粹に於て小右記天元元年四月三之一ともいつしとあり

月十日左大臣頼忠公一女入内道子十二日子始参上殿

下同参餅四種威銀盤今ハ元服ふととらとめ今物

てふよも餅威ふとけり四季候又十月亥の子りらひぬ

しけるハ十三のちらぬよあつとハ十二巻をま

つりてはるりきよとらふの清もぬれさせお

はしほし清いきなどおよばしめてつらおのくをこ

し流りぬ此あとけりよハまはしけりとの見及とも

とと但馬の國より始て亥の子りらひめてはけりしと

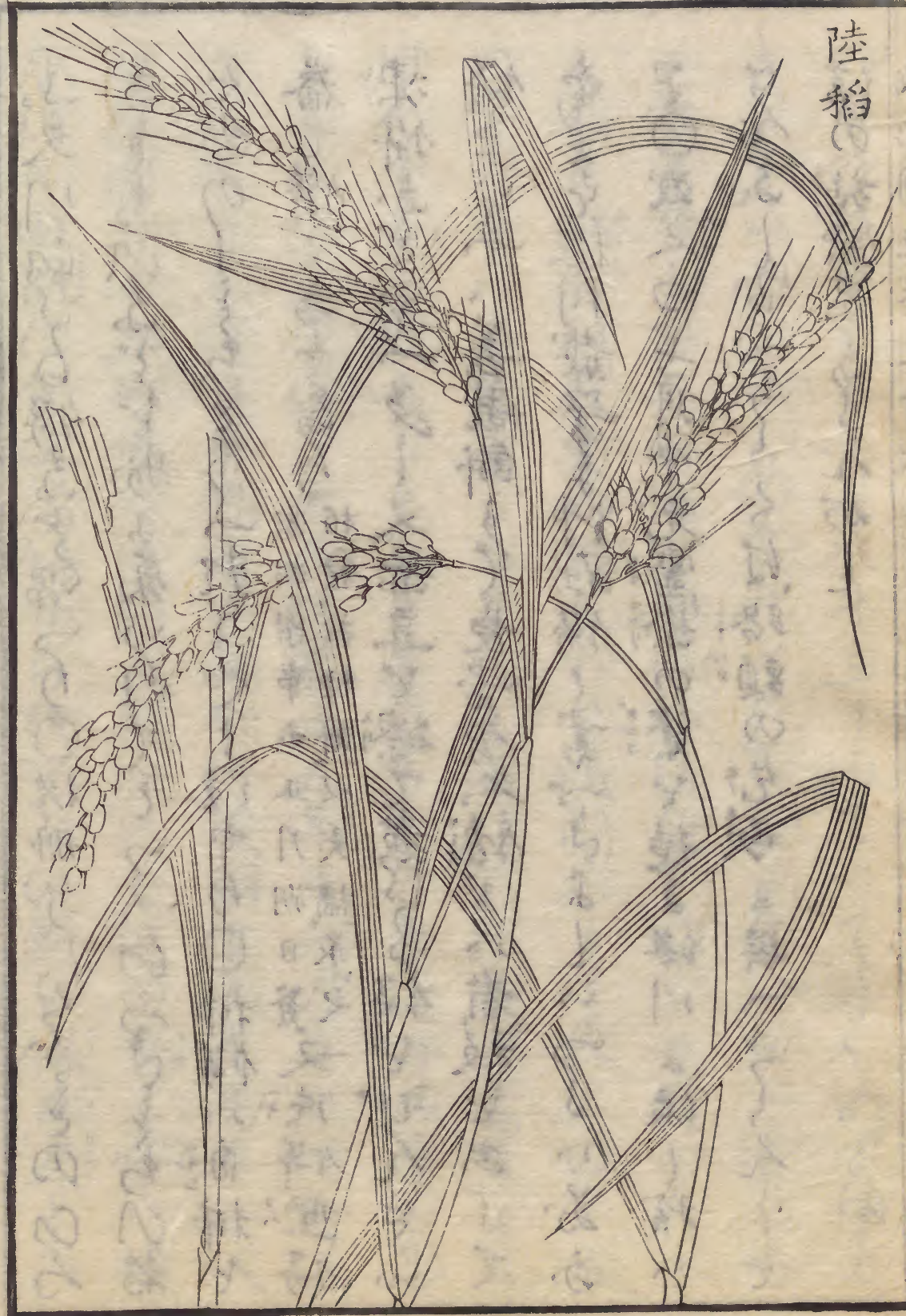
と國史よけり此月の清事とや子夜行といふ書よハ

十月ハ亥の月めして亥の日用らるると承ハ子と一年

の月の数もさうふよハ十三りみてめてさくあはれし
 きまていみしまりのあれづとておこるいふもよし付
 る掌中曆も亥子の餅七種の粉と合て作る七種の粉ハ
 大小豆豆サケ豆胡麻粟柿糖ありせ漬問答も十月上の亥日
 の餅の事ハ内蔵意よりともは其感積の程嚴重ありより
 げんてうといふくもり是今の十月亥猪の俗節といん
 えさり○三夜餅ミヨサノモチヒハ中右記寛治五年十一月二日女御入
 内之後有三夜餅事件餅民部卿所被調進也是高年之人
 所役者主上入御帳之後関白殿取之令進○季子餅イトコノモチハ臘
 月朔日の朝アサミに食ふイハヒ餅ハ故よあハの朝と餅ハ月立とハ

ふ又川ハの餅ハ留り○枕冊子にくハこのひる
 きともいふと物も取れてといふひるきともいふ者
 々ののハとちといふハ也と注やり○柿餅ハ白柿と
 眷て餅とあハあり燕朝樂事云正月朔日簀又片餅堅餅
 凍餅シニふどハ多し又赤豆と擦ハて煮ハる餅とぜんさい
 餅といふハ善哉餅とて長崎唐人館ヤシキハ省板と出して
 賣賣を梅村載筆ハ神在餅と書ハぶハよしいつハハあふ
 〇或人曰七月中元靈祭タマエマツリの築ザシコを徒ハ海川ハ流し捨ハ
 せんふしハべハくは路頭ミチハタの乞西モリモウシと興ハへハんハと
 信ハの施ハ餓鬼ハあハんハがし

陸稻



白田稻

野稻

岡稻

早稻

岡穂

陸稻六書故○淵鑑類函稻性宜水亦有同類而陸種者謂
 六月至九月乃獲北早稻齊民要術早占農書占城禾要録
 方地寒十月乃獲

黑穀米

論格物

占稻

本州

雷稻

西事

尖米

黄秣

以上

類藁按子綱目子占城稻とて稲の一名と云ふハ得也
 農書及爾雅翼子考つて稲と云ふハ本自ふるま
 と云ふ

蕃名 アシケルレイスト

岡稻ハじり 皇孫瓊々杵尊襲の高千穂峯へ天降玉

ひし時深霧にぎはへし 晦蒙し、此稻穂とて打撒る

霧島嶽ふるを考へよ又此東峰に神代靈牙一枚と存
 體也今山上に植ハ折しと禁よ崇て新嶽権現社と云
 大乃己隆出以然と天明初池田某者撰作て傍に立
 此と除去し事ハ悪疫癘つ以通證に吾先代の事と
 西遊記に此偽牙尚在よし著せは之亦訛傳と附記
 皇孫西州子降臨て邊疆と理め而姓と安し玉の福植と
 ち撒ふふくは此其子耕種を教導す玉ひしよし
 小て々も種うるわざは撒さけふふるしよて
 百姓始て天津陰日御蔭と作よまうそ々まう
 し相伝夢夕深霧と一忽よ冨る信て恰と青霄とや
 うつと王澤と被り山かく流り流さしよやさてそ撒

霧島嶽ふるを考へよ又此東峰に神代靈牙一枚と存
 體也今山上に植ハ折しと禁よ崇て新嶽権現社と云
 大乃己隆出以然と天明初池田某者撰作て傍に立
 此と除去し事ハ悪疫癘つ以通證に吾先代の事と
 西遊記に此偽牙尚在よし著せは之亦訛傳と附記
 皇孫西州子降臨て邊疆と理め而姓と安し玉の福植と
 ち撒ふふくは此其子耕種を教導す玉ひしよし
 小て々も種うるわざは撒さけふふるしよて
 百姓始て天津陰日御蔭と作よまうそ々まう
 し相伝夢夕深霧と一忽よ冨る信て恰と青霄とや
 うつと王澤と被り山かく流り流さしよやさてそ撒

凡苗二三寸ナナも浅ナシくう耐クササカより耘シヒマ好シヒマて美シヒマ好シヒマからけは
 一糞シヒマ十分水シヒマと滑シヒマ々し肥シヒマる所ハ葉シヒマのシヒマ茂シヒマて穂シヒマ満シヒマち又
 早シヒマやけぬと澆シヒマくるシヒマ僻シヒマ遠シヒマくシヒマ遊シヒマウシヒマのシヒマ地シヒマハシヒマあシヒマいシヒマづシヒマし
 勤シヒマて土シヒマおシヒマのシヒマいシヒマせシヒマよシヒマふシヒマのシヒマおシヒマはシヒマまシヒマれシヒマゆシヒマりシヒマやシヒマうシヒマやシヒマまシヒマあシヒマらシヒマくシヒマは
 穫シヒマ収シヒマハシヒマ少シヒマのシヒマ福シヒマのシヒマ渠シヒマとシヒマ同シヒマし○農シヒマ業シヒマ全シヒマ書シヒマ曰シヒマ野シヒマ稻シヒマのシヒマ種シヒマ々シヒマ水シヒマ
シヒマ浸シヒマハシヒマふシヒマとシヒマ二シヒマ三シヒマ日シヒマふシヒマしシヒマてシヒマ瓦シヒマ石シヒマ日シヒマよシヒマりシヒマくシヒマ口シヒマのシヒマ少シヒマしシヒマい
シヒマらシヒマくシヒマとシヒマ足シヒマてシヒマ反シヒマ肥シヒマ々シヒマ用シヒマゐシヒマてシヒマ横シヒマ筋シヒマ々シヒマ涼シヒマくシヒマまシヒマりシヒマまシヒマのシヒマ前シヒマ足シヒマを
シヒマとシヒマにシヒマしシヒマくシヒマまシヒマきシヒマ土シヒマ々シヒマおシヒマ何シヒマ々シヒマしシヒマ今シヒマ按シヒマよシヒマ是シヒマ農シヒマ政シヒマ全シヒマ書シヒマ
シヒマ種シヒマ々シヒマ早シヒマ稻シヒマ法シヒマ大シヒマ率シヒマ如シヒマ種シヒマ麥シヒマ治シヒマ地シヒマ畢シヒマ豫シヒマ浸シヒマ一シヒマ宿シヒマ然シヒマ後シヒマ打シヒマ潭シヒマ下シヒマ子シヒマ用シヒマ州シヒマ灰シヒマ和シヒマ水シヒマ澆シヒマ之シヒマ每
シヒマ翻シヒマ草シヒマ一シヒマ次シヒマ澆シヒマ糞シヒマ水シヒマ一シヒマ次シヒマ至シヒマ於シヒマ三シヒマ脚シヒマ秀シヒマ矣シヒマくシヒマらシヒマくシヒマ戦シヒマ解シヒマ述シヒマ之シヒマは
シヒマ凡シヒマ野シヒマ稻シヒマとシヒマ何シヒマ種シヒマ々シヒマ澆シヒマ之シヒマ法シヒマハシヒマ佛シヒマノシヒマ法シヒマ也シヒマとシヒマ加シヒマしシヒマは
シヒマ但シヒマ今シヒマふシヒマてシヒマ未シヒマ爲シヒマくシヒマ知シヒマやシヒマとシヒマし



和

陸
和

成
形
圖
說
卷
之
十
六

三
十
三

の時を^{ハシヤン}懸^{ハシヤン}貸^{ハシヤン}とくを^{ハシヤン}納^{ハシヤン}るあり 今俗に唐干あり 又船米
 の種を^{カラ}唐^{カラ}と^{ハシヤン}知^{ハシヤン}し赤^{アカ}と^{ハシヤン}白^{ハシヤン}しと^{ハシヤン}り^{ハシヤン}ふ^{ハシヤン}との^{ハシヤン}何^{ハシヤン}も^{ハシヤン}存^{ハシヤン}名^{ハシヤン}多^{ハシヤン}伊^{ハシヤン}登^{ハシヤン}
 知^{ハシヤン}是^{ハシヤン}々^{ハシヤン}の大^{ハシヤン}冬^{ハシヤン}米^{ハシヤン}也^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}は^{ハシヤン}と^{ハシヤン}え^{ハシヤン}且^{ハシヤン}何^{ハシヤン}の^{ハシヤン}所^{ハシヤン}乃^{ハシヤン}赤^{ハシヤン}米^{ハシヤン}と^{ハシヤン}混^{ハシヤン}し
 て^{ハシヤン}統^{ハシヤン}て^{ハシヤン}大^{ハシヤン}唐^{ハシヤン}米^{ハシヤン}と^{ハシヤン}し^{ハシヤン}唐^{ハシヤン}米^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}ふ^{ハシヤン}て^{ハシヤン}占^{ハシヤン}城^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}と^{ハシヤン}混^{ハシヤン}濁^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}と
 の^{ハシヤン}は^{ハシヤン}播^{ハシヤン}ざ^{ハシヤン}り^{ハシヤン}の^{ハシヤン}を^{ハシヤン}し^{ハシヤン}き^{ハシヤン}り^{ハシヤン}大^{ハシヤン}唐^{ハシヤン}米^{ハシヤン}ハ^{ハシヤン}大^{ハシヤン}冬^{ハシヤン}米^{ハシヤン}の^{ハシヤン}混^{ハシヤン}字^{ハシヤン}あり
 南^{ハシヤン}産^{ハシヤン}志^{ハシヤン}引^{ハシヤン}聞^{ハシヤン}中^{ハシヤン}記^{ハシヤン}云^{ハシヤン}秋^{ハシヤン}種^{ハシヤン}冬^{ハシヤン}熟^{ハシヤン}曰^{ハシヤン}晚^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}歲^{ハシヤン}一^{ハシヤン}熟^{ハシヤン}者^{ハシヤン}曰^{ハシヤン}大^{ハシヤン}冬^{ハシヤン}米^{ハシヤン}
 州^{ハシヤン}時^{ハシヤン}珍^{ハシヤン}云^{ハシヤン}秬^{ハシヤン}似^{ハシヤン}稷^{ハシヤン}而^{ハシヤン}粒^{ハシヤン}少^{ハシヤン}始^{ハシヤン}自^{ハシヤン}閩^{ハシヤン}人^{ハシヤン}得^{ハシヤン}種^{ハシヤン}於^{ハシヤン}占^{ハシヤン}城^{ハシヤン}國^{ハシヤン}其^{ハシヤン}熟^{ハシヤン}最
 早^{ハシヤン}六^{ハシヤン}七^{ハシヤン}月^{ハシヤン}可^{ハシヤン}收^{ハシヤン}今^{ハシヤン}此^{ハシヤン}方^{ハシヤン}へ^{ハシヤン}船^{ハシヤン}來^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}と^{ハシヤン}の^{ハシヤン}、^{ハシヤン}う^{ハシヤン}ら^{ハシヤン}大^{ハシヤン}冬^{ハシヤン}米^{ハシヤン}一
 二^{ハシヤン}種^{ハシヤン}よ^{ハシヤン}こ^{ハシヤン}と^{ハシヤン}は^{ハシヤン}藏^{ハシヤン}葉^{ハシヤン}黒^{ハシヤン}と^{ハシヤン}稱^{ハシヤン}と^{ハシヤン}閩^{ハシヤン}種^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}獲^{ハシヤン}當^{ハシヤン}り^{ハシヤン}又^{ハシヤン}一^{ハシヤン}種^{ハシヤン}唐^{ハシヤン}
 之^{ハシヤン}と^{ハシヤン}稱^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}と^{ハシヤン}の^{ハシヤン}は^{ハシヤン}生^{ハシヤン}葉^{ハシヤン}蒼^{ハシヤン}乃^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}長^{ハシヤン}大^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}て^{ハシヤン}實^{ハシヤン}多^{ハシヤン}し

凡て野稻よ傳り

此^{ハシヤン}の^{ハシヤン}水^{ハシヤン}陸^{ハシヤン}二^{ハシヤン}種^{ハシヤン}あり 陸稻ハ 又^{ハシヤン}稷^{ハシヤン}米^{ハシヤン}と^{ハシヤン}一^{ハシヤン}類^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}て^{ハシヤン}米^{ハシヤン}

赤^{アカ}き^{ハシヤン}もの^{ハシヤン}と^{ハシヤン}紅^{ベニ}玉^{ハシヤン}と^{ハシヤン}云^{ハシヤン}と^{ハシヤン}茎^{カサ}穀^{ハシヤン}並^{ハシヤン}に^{ハシヤン}常^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}よ^{ハシヤン}符^{ハシヤン}符^{ハシヤン}あり^{ハシヤン}但^{ハシヤン}

芒^{ハシヤン}類^{ハシヤン}極^{ハシヤン}て^{ハシヤン}赤^{アカ}き^{ハシヤン}耳^{ハシヤン} 按和名鈔引廣志赤糠稻多々の或昂

米^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}蟬^{ハシヤン}鳴^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}の^{ハシヤン}為^{ハシヤン}何^{ハシヤン}と^{ハシヤン}其^{ハシヤン}白^{ハシヤン}米^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}の^{ハシヤン}對^{ハシヤン}へ^{ハシヤン}い^{ハシヤン}農^{ハシヤン}人^{ハシヤン}ハ^{ハシヤン}

苗^{ハシヤン}と^{ハシヤン}見^{ハシヤン}知^{ハシヤン}り^{ハシヤン}葉^{ハシヤン}の^{ハシヤン}長^{ハシヤン}に^{ハシヤン}披^{ハシヤン}去^{ハシヤン}と^{ハシヤン}り^{ハシヤン}又^{ハシヤン}之^{ハシヤン}米^{ハシヤン}ハ^{ハシヤン}葉^{ハシヤン}細^{ハシヤン}く^{ハシヤン}短^{ハシヤン}

く^{ハシヤン}最^{ハシヤン}柔^{ハシヤン}軟^{ハシヤン}少^{ハシヤン}して^{ハシヤン}生^{ハシヤン}粒^{ハシヤン}小^{ハシヤン}く^{ハシヤン}出^{ハシヤン}し^{ハシヤン}多^{ハシヤン}ハ^{ハシヤン}世^{ハシヤン}多^{ハシヤン}し^{ハシヤン}偶^{ハシヤン}々^{ハシヤン}何^{ハシヤン}と^{ハシヤン}

の^{ハシヤン}を^{ハシヤン}短^{ハシヤン}く^{ハシヤン}軟^{ハシヤン}あり^{ハシヤン}又^{ハシヤン}赤^{アカ}白^{ハシヤン}兩^{ハシヤン}種^{ハシヤン}何^{ハシヤン}も^{ハシヤン}白^{ハシヤン}き^{ハシヤン}の^{ハシヤン}の^{ハシヤン}も^{ハシヤン}多^{ハシヤン}く^{ハシヤン}芒^{ハシヤン}

く^{ハシヤン}稻^{ハシヤン}米^{ハシヤン}と^{ハシヤン}も^{ハシヤン}に^{ハシヤン}白^{ハシヤン}し^{ハシヤン}或^{ハシヤン}ハ^{ハシヤン}稔^{ハシヤン}ハ^{ハシヤン}淡^{ハシヤン}紅^{ハシヤン}小^{ハシヤン}して^{ハシヤン}米^{ハシヤン}の^{ハシヤン}を^{ハシヤン}白^{ハシヤン}と^{ハシヤン}何^{ハシヤン}

且^{ハシヤン}并^{ハシヤン}之^{ハシヤン}と^{ハシヤン}白^{ハシヤン}逆^{ハシヤン}米^{ハシヤン}と^{ハシヤン}云^{ハシヤン}凡^{ハシヤン}乾^{ハシヤン}磨^{ハシヤン}と^{ハシヤン}懸^{ハシヤン}磨^{ハシヤン}との^{ハシヤン}実^{ハシヤン}の^{ハシヤン}乾^{ハシヤン}

磨るハ穀とお落せりまぐ磨りくるあり蒸磨ハ穀と俵
子裏水よ漬し瓶めて蒸て糶とありしうよて其製造の
ちぐいめく其性味割柔大よ奪きり○此もの早中晩及
糯の種族あり三月午苗代は前つくも也率に種穡の時
節ハ常稲は異ふと○此ものハ稷稲よよりしかつざ
味瘠土乃停田ふとよ植るよのふれハ四月の後前よ浸
種十よハぬまてハ苗代とわど昂よ実播して稍白芽
と出と前つくるよのそ耕て糶いろの法ハ常とおれ
しく既に種撒あんともる前ゆさよりその田土と干
乾し浮土も肥感ハ馬糞と晒しいと細やうにかき碎き

粉のこくして白沙子種子と採まやうこと麦粟い
るよいとし○凡田一畝ハ種子一升の積めし番の
こも器よ入て三指一撮ふして六寸指は撮つては
あり又長手の肩後箱よ盛て双のふとと種と撮り三
尺ちごんおさよハ投撒するすりよ概疏の差きく基の秤
の整るるぶく前踏るありその敏ふるともよ子種子塊
とつうして擲棄るぶとし是之農夫の熱のわざあり○
早稲ハ毛實とつるもの完子し三月中に前附七月初よ
收りくるなり
せふく糶米共
よま赤あり
中稲一名赤やばしとつ
とつうして蓋大冬の訛ふるは是洋菓の種あり又横川米

白米シラヒは、おのほむと精シラヒぬもとも赤米アカカハ除シラヒむ而シラヒも蒸米シラヒハ能
繫シラヒもけ赤穀アカカハ剥シラヒ去シラヒ白米シラヒも室シラヒもともさうれども下等
うゝハ揃シラヒぶづゝん○長崎聞見録曰唐土の菓ハ膏澤
あくお易くて濃ふとに繋りて久しく保ちづゝしそ穀
の膏潤あき以て尺れハ好らう一さすや唐人此地
の菓ハ何シラヒは小して縄ふとにゆり下と壯シラヒく調法あうと
尺てお称款シラヒはと何り此もとも西土の稗米ハ好方此秘
子擬シラヒふつきと志あつしさうるに我人ハ美シラヒしき稲を飽
まで喰シラヒちれて私シラヒふとハ人中シラヒは齋シラヒはと羞シラヒとせるハ自出
あろのつらぬもを或いとの書りるものみ太字の化と

白米シラヒは、おのほむと精シラヒぬもとも赤米アカカハ除シラヒむ而シラヒも蒸米シラヒハ能
繫シラヒもけ赤穀アカカハ剥シラヒ去シラヒ白米シラヒも室シラヒもともさうれども下等
うゝハ揃シラヒぶづゝん○長崎聞見録曰唐土の菓ハ膏澤
あくお易くて濃ふとに繋りて久しく保ちづゝしそ穀
の膏潤あき以て尺れハ好らう一さすや唐人此地
の菓ハ何シラヒは小して縄ふとにゆり下と壯シラヒく調法あうと
尺てお称款シラヒはと何り此もとも西土の稗米ハ好方此秘
子擬シラヒふつきと志あつしさうるに我人ハ美シラヒしき稲を飽
まで喰シラヒちれて私シラヒふとハ人中シラヒは齋シラヒはと羞シラヒとせるハ自出
あろのつらぬもを或いとの書りるものみ太字の化と

籩



籩孫

比通知籩

和名鈔○即籩孫也尾張

比古波衣

新撰字鏡按比古ハ曾孫と比古古とつら

と云古言梯細枝ありこは和名鈔ハ前漢天文志註

訓ハ古とく其抄ハ野生曰旅ハ字鏡ハ穀再生と

中謂桑榆孽生為葆禾野生曰旅ハ字鏡ハ穀再生と

比古波衣と訓ハ和名鈔ハ木藁亦訓ハ地冬と

古ハとハ新古今ハ好ハ号ハ小田の去平の

曾於比籩通例引手蓋比通知の轉ハ或云引ハ比古

引手の訛ハ蓋ハ通手ハ奥手の出ハ引ハ比古

ど明年ハむりも籩存むりとの再生ハ水結籩之下

政全書云鳥口籩色黒而能水与寒又謂之冷水結籩之下

品とん梁日次紀獲籩後再生又生の謂此地

度生こり再籩の謂此地

ハ俗意あり

稻孫廣雅稻已割而復抽曰稻孫○
再熟稻唐書開元十
九年揚州奏

再熟稻四民月令養生要集等亦同
其粒與常稻無異
再稔農政全書其已刈而根復發
苗

○秩韻會毛氏云秩本再生稻
刈而重出後先相繼故借為秩序字
再生稻字彙○秩王

籍金洲白香秫以上閩書南產
再生稻篇再生稻也

此通知ハ穀土より水田乾て復す
とんえりり 和名鈔

小ハ自生稻の部ニ收也
とんえりり 和名鈔

おろしつちの種もぬハ
とんえりり 和名鈔

おろしつちの種もぬハ
とんえりり 和名鈔

おろしつちの種もぬハ
とんえりり 和名鈔

おろしつちの種もぬハ
とんえりり 和名鈔

不成者謂之董よとんえりり 和名鈔

一年秋所遣多禰島使人等貢多禰國圖其國去京五千餘

里居筑紫南海中其國稷稻常豐一道而收云々多禰國ハ

即今の仲繩島也仲繩即流求の正名也後漢書所謂

今高恩納嶽恩納間切等所又流求いハ屋其惹いハ

天下大神大穴持命與須久奈比古命巡行天下時稻種墮

此處故云種神龜三年改字多禰とんえりりハ

天皇廿四年掖玖人先後并三十人來之 舒明天皇元年

夏四月遣田部連^{ミナモト}於掖玖^{ウケク}二年秋九月田部連等至自掖
 玖三年春二月掖玖人^{ウケク}歸化^{キリ}云々田部八田地民戸^{ウケク}と掌^{ウケク}
 の官あり掖田戸定民籍の事舒田部連掖玖在在の事
 一年是時より南島の田地戸數を檢校し貢賦の事因
 て行遣しとハんる其三年春二月掖玖人歸化宣子朝
 貢の始と云所謂掖玖亦々の流求あり事詳南島凡奄
 美島より以南沖繩まで六月霜降の節稲田の苗代
 と下して臘月或ハ正月に早苗と種蒔は扱そうく毎
 子稲科のゆり一水芋と押添あり是地勢はよく稲の
 うれば滋^{サカ}ばととて多し己子春に亂と交てより日

月子長茂五月には成熟して刈収は根より五六寸の所
 と切りばと種科より刈り乃種蒔立て秋晩の頃二度刈
 とするりの多し但又すを種蒔ハ本年の是沖繩と根り
 是田稼よてその種子多ふとハ種て多きとあり
 是より天武紀乃多祢島てふもの即流求あるを云ふ
 きあり今按凡いみ一南島と云て掖玖多祢と云
 子往者皆経歴の由る路ありハ也警ハ南島人川辺郡七
 島と接て土噶刺と云つたバと土噶刺ハ孝徳紀に始
 て吐火羅國と云え齊明紀にハ觀貨邏國と云都貨邏人
 るも云はし或本は墮羅人と注し又續紀にハ度感島と
 云ふとのりて後ハ徳島と注し古今聲音の轉あり今
 は七島の中ハ寶島のり云旧音と傳つて七島ハ是徳
 島へ往者の中ハ寶島の中あり云云齊明紀注或本墮羅ハ
 蓋今七島中の平島あり此流求と接して多祢と云掖玖

於呂加於比稻和名鈔○

野立生稻

稽亦作稻和名鈔引唐韻自生稻也○秘音棹集韻禾稽
生也○秘音說文稻今落來年自生謂之秘○後漢
光武紀嘉穀作嘉野旅生注寄也不因播種而生唐書馬燧傳
大曆四年兵亂後大旱田中生稽木人頗便之注稽禾再生
也唐書開元十九年揚州奏稽生稻二百一十五頃再熟
一十八百頃此自生稻孫野稻吳志嘉禾三年由
北のり唐地理志滄州本魯城乾符元自生稻唐韻
為禾興縣○唐地理志滄州本魯城乾符元自生稻唐韻
年生野稻水穀十餘頃魏創民就食之自生稻見上
○通雅揚州生稽稻自生稻也○
從字彙補今年稻災來年自生也
蕃名ウイルレレスト
おろかおひ即自生也凡播種と詩とて野生と

この其量多く茅苳カヤスギあて稲穂と考イロるあり本藩霧

島嶽の自然稻スギと其量ハ苳カヤスギより輓チカゴロ近安永八年十月

綱目大隅郡檣島炎上して海中五の新嶼と涌出也

始檣島嶺頂の東南兩岨嶺あり湖あり水
他と云ふを白し同一所嶺あり湖あり水
遊遊過遊大遊小遊を遊白遊し遊同遊一遊所遊嶺遊あり遊湖遊あり遊
以兩ハ流流さ流ぎ流を流沙流浜流に流流流ハ流火流の子流乃流ま流は流燒流き流む流の流云流
果して朝日味味刺刺兩岨岨より火火を火為火り火前前日日比比者者云云ふふ
方教教叶叶里里又又當當かかのの己己午午のの刺刺為為中中のの井井患患沸沸騰騰所所をを選選
出又海海水水冪冪を冪子子變變はは是是火火變變乃乃徵徵也也凡凡山山上上火火とと若若以以
相望望のの交交ももよりより蓋蓋海海嶺嶺のの候候もも傳傳ふふとと云云今今事事もも同同てて附附
以以於於是是檣檣島島及及比比隣隣のの地地沙沙反反降降積積てて堆堆出出とと七七尺尺許許田田畝畝
川谷谷悉悉くく埋埋没没しし白白沙沙渺渺々々はは耳耳時時にに白白沙沙原原頭頭子子茅茅苳苳
自自生生しし其其末末子子各各稻稻實實とと結結氏氏類類とと壘壘又又新新嶼嶼此此上上もも播播

種と云ふ松の稚生茅比嫩苗叢茂てそ茅穂と云米粒と
 着て土民採食するも其り皆曰天道人を殺すと蓋極島
 火変新鴻涌出ると其の續紀所載神護中大隅海中神造
 の島及同紀天平寶字八年鹿島信介村の前は化成島
 也しより此の了僅に三度も此を今復新嶼と涌出と
 るは混沌再い來り湊津自生うぶとし故に其勢氣荒
 化して未稲と後竹変變して米粒と結ぶと云とるも
 竹實米粒と云次霧島嶽淡土の時あり後又肥前國
 人より傳はりし其の客歲肥の雲仙島に大發して
 雑樹叢生ふる出ると云云其の松樹ハるを
 獨持多かりぬ其の生植るが島に湧かせし
 不測わがせとおとろかしと云はれりぬ實にやはし

のいみじいと云は例嘗て其自生稻の種子と云て命
 よおのいみじいと云は例嘗て其自生稻の種子と云て命
 して試に植まじりよ米よと出はの穂ハおしく惹きし
 て稲ふしそ字ハ同のりけやあき津ふれハ穂ふり
 らはさ〜ハ上者よ自生稻と云ものとは是も固て其の
 名も〜按に續紀和銅六年正月左京職獻稗化為木一
 莖淵鑑類函江表傳孫亮五鳳元年父趾稗草化為稻大日
 本史引畧記曰延長五年四月北山野穀旅生人競採之

